

のまま生かして、自分と同じように生きる子供たちを励まそうと考えた。主人公には子供が大好きな犬。こうして親もなく、ひとりぼっちの『のらくろ』が生まれた。

●好評で日本の雑誌

当時は少年倶楽部を毎月買ってもらえる家は少なく、雑誌は借りて読むという回し読みであった。

とくに故郷を離れ、都会の商店などに働きに出ていく少年たちのために、自分の逆境を『のらくろ』の世界に再現した。孤独の『のらくろ』は金もなく、身寄りのない。日曜日になっても行くところがなく、野原にひとりじゃんぼり。こんな姿が誌上に載ると「かわいそうだから僕の家において…」という手紙が全国各地から講談社に殺到した。マンガの『のらくろ』は全国の少年たちの心をつかんだ。

田河ははじめ、軍隊と同じように『のらくろ』も一年で除隊させるつもりだった。だが一年ごとに階級があがるにつれ、少年倶楽部の発行部数も倍々ゲームのように増えた。そうなるに、止めるに止まらない羽目になった。『のらくろ』がスタートしたとき、三万部だった少年倶楽部は、一躍、50万部に伸びて日本の雑誌となった。

このように少年倶楽部が伸びるにつれて、これを苦々しく見ていたのが、内閣情報局と軍部だった。一九



のらくろのグッズに囲まれた田河
1935（昭和10）年頃自宅にて
講談社提供

四一（昭和16）年にはいると、わが国の出版界は完全なる国家統制となった。この年の6月、出版用紙配給割当規定が設けられ、中央公論や改造など多くの雑誌が「時局を解せざるもの」として紙の配給をストップさせられた。こつした「言論の嵐」はマンガの世界にも及んで「名誉ある軍を、のら犬で風刺するとは…」と、暗に紙の配給の打ち切りを宣告された。少年倶楽部で10年10か月（昭和6年1月号〜16年10月号）、国民から愛された『のらくろ』は国家機関によって抹殺された。

●戦後は喫茶店のマスター

戦後の『のらくろ』は軍事雑誌の『丸』に復活した。

マンガは再登場の『のらくろ』に召集令状がきて、猛犬連隊に復帰、山猿軍との戦争に従軍した。だがこの戦いも間もなく解決して平和となり、復員した『のらくろ』も、戦後の苦しい世の中を体験した。

職業もはじめは保険の外交員をしたが成績が上がらず、露天商や、旅館の番頭などを経験した。最後は喫茶店のマスターとなってやっと安定、結婚もしたところで、一九八〇（昭和55）年、『のらくろ』に終止符をついた。

思えば一九三二（昭和7）年、『のらくろ二等卒』としてスタートからちょうど50年、半世紀にわたる長期シリーズであった。

一九九九（平成11）年の「田河水泡生誕百年」を記念して、佐久市との合併前の臼田町の有志たちがのらくろによる「町おこし運動」を計画、『のらくろ会』の結成を呼び掛けた。その結果、町内はじめ松本、上田など県内各地から五百人を超える会員が集まり、講演会や『のらくろ』展示会を開催した。

（中村勝実）

参考文献

田河水泡ほか3人『芸術家の独創』

日本経済新聞社（日経）ビジネス人文庫 私の履歴書

中村勝実『近代佐久を開いた人たち』 樺

肖像写真提供

田河水泡・のらくろ館

佐久の先人たち¹³

のらくろ描いて半世紀

た がわ すい ほう

田河水泡

(1899~1989年)



戦前の小学校へ通った人なら、誰でも忘れられないマンガは『のらくろ』だろう。主人公の『のらくろ』は、どこにもいるのら犬の黒吉。当時の子どもは兵隊ごっこが大好きという世相に乗って、『のらくろ』を兵隊に仕立て、10年にわたった連載、戦後篇を加えると、実に半世紀にわたる“マンガ劇場”だ。

●はじめは落語作家

『のらくろ』の作者、田河水泡は本名高見沢伸太郎。生まれは東京市本所区林町、現在の墨田区立川だが、数代前まで佐久市北川に住み、彼自身も「佐久こそわがふるさと」と、生涯佐久との交流を忘れなかった。そのペンネームも、佐久が発祥の地とする高見沢を「一」マ字で「TAKAMIZ・AWA」。これを漢字に置きかえ、田河水泡としたものだ。

田河の少年時代は『のらくろ』と同様、孤児同然で育った。生後1年で母と死別、伯母の家に預けられた。

伯父は絵を嗜み、寄席が大好きという趣味人で、いつも田河を連れて歩いた。ここで絵心と芸の面白さがはぐくまれた。

その伯父も小学校四年生のときに亡くなったので、小学校を卒業とともに薬屋に奉公し、「小僧」と呼ばれる住み込み店員となった。さらにメリヤス工場へと職をかえ、二十歳になって兵隊にとられた。除隊後に好きな美術学校へ入ったものの、卒業したときは二十六歳。大正時代も終わりに近いころだった。

当時は不景気続きで、学校は出て職はなく、生活は苦しい時代だった。映画のポスターから看板描き、金になるなら何でもやった。「こんなことでは駄目になる」と感じ、職をかえることにした。

「何かないか」と盛り場を歩いているうちに、寄席に入った。そこでは落語をしており、とたんに伯父について行った子ども時代を思い出した。「おれにも出来るかも…」と、その夜早速、新作落語を試しに書いてみた。その原稿をおくるおそるおそる講談社に持って行ったと

ころ、同社発行の面白俱樂部の編集長が「面白い」といつて採用してくれた。そのうえペンネームも落語作家らしく「高沢路亭」とつけてくれた。

彼の落語原稿は次々に売れた。これで世渡りが出来る自信がついたとき、編集者が「あなたはもともと絵かき。落語の滑稽ものと絵を組み合わせたら面白い」と、マンガを提案した。

少年俱樂部（講談社発行）に『のらくろ』が登場したのは、一九三二（昭和6）年の新年号だった。当時は世界恐慌にさらされ、農村も都会も生活難にあえいでいた。そんなときに頭に浮かんだのは、幼くして母と死に別れ、父親からも見離されて伯父夫婦に育てられ、貧しさのなかで生きてきた体験だった。それをそ



のらくろ連載第1号『のらくろ漫画大全』収録
©田河水泡/講談社